



# JIC インフォメーション

第 191号 2017年4月10日  
年4回 1・4・7・10月の10日発行

1部500円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPCビル 7F TEL: 03-3355-7294 [jictokyo@jic-web.co.jp](mailto:jictokyo@jic-web.co.jp)

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェニー



## ロシア・旧ソ連 国際交流誌



モスクワ「ジャムの日」イベント(16年7月)



### 《特集》 JICロシアセミナー

プーチン訪日と日ロ交渉の行方

下斗米 伸夫 (法政大学教授) . . . . . 2P

ロシア極東の経済と日本

浅井利春 (元ウラジオ日本センター所長) . . . 12P

【イベント情報】ロシアの文化 その魅力と鑑賞法 . . . 13P

### 【旅行記】 ソロヴェツキー諸島 (第3回)

人を変えてしまう島 . . .モロゾフ・デニス . . . . . 14P

### 【ロシア最新事情】

変わりゆくモスクワの街角 . . . . . 16P

ロシア不思議体験「国境を越えれば世界は変わる」

. . . 白井 秀治 . . . . . 18P

JICでは、Jクラブ(JIC友の会)会員を募集しています。  
年4回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

11 月 19 日 JIC ロシアセミナーで、法政大学の下斗米伸夫先生に「日ソ共同宣言 60 周年・プーチン訪日と日ロ交渉の行方」と題して講演をしていただきました。直前に迫ったプーチン大統領の 12 月訪日を前に、国際政治の大変容のなかでの日ロ関係、戦後 70 年の歴史を踏まえた日ソ(日ロ)交渉の舞台裏について、興味深いお話を聞かせていただきました。日ロ首脳会談の結果は周知の通りですが、その背景と今後の展望を読み解く上で貴重な材料をいくつも提供する内容となっています。(編集部)。



## JICロシアセミナー報告

# プーチン訪日と日ロ交渉の行方

下斗米伸夫・法政大学教授

何よりも今年になって感じることですけれども、世の中がガラガラと音を立てて変わりつつあるという感覚がします。私も“ロシア屋”にとっては、今からちょうど 25 年前にソ連崩壊という、三億人近い巨大な超大国がこれまたガラガラと音を立てて崩壊したことが記憶に新しいわけですが、今年がアメリカ大統領選挙において誰も予想しなかったトランプ政権が生まれることになりました。それこそ日本のベスト・アンド・ブライテストの専門家の方々の予測がなぜこれほど違ったのだろうかという思いにすらなるわけですが、日露関係というものはどうしてもアメリカという存在、アメリカを中心とした現在の国際政治経済システムとその変容というものの影響を受けざるを得ませんので、まずはこのトランプ政権の誕生について一言コメントをさせていただきたいと思います。

### トランプ政権誕生の衝撃

アメリカ大統領選挙の開票結果が、予想を上回るテンポでトランプ勝利の方向で出てきた 11 月 9 日、ナインイレブン(9・11 世界同時多発テロ)ならぬ 11・9 イレブナインの日に、私が思い出したのはあるアメリカ映画のことで、アメリカの東と西の両端、ここではクリントン票(=民主党の票)が多かったのに対し、中西部を中心にアメリカのそれこそ真ん中がトランプ支持票で真っ赤になっていきました。日本のいろんなコメンテーターが、この投票結果を予想外であるとコメントしている中で、私が思い出したのは、数少ないトランプ支持の映画監督で、俳優でもあるクリント・イーストウッドが製作した映画『アメリカン・スナイパー』(2014 年)です。この映画を観ながら、数年前にある国際政治の専門家が言っていたことを思い出しました。その方はクリントン支持に近いリベラル派の女性国際政治学者なのですが、「今、アメリカ中西

部で何が起きているか」というと、中西部の貧しい白人の兵士たちがイラクなり中東に派兵されて行って、数カ月おきに小さな町の教会に遺体となって帰ってくる。そういうところでは、おそらくワシントンやニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルスといった大都会では見えないようなインパクトがこの 10 年間ずっと続いているのだ。」という話なのです。

この中東でのアメリカの対テロ作戦は、2001 年 10 月のアフガニスタン介入から始まって、イラクに大量破壊兵器があるという名目でブッシュ政権が開始したイラク戦争(2003 年 3 月)以来、現在のシリアに至るまで十数年経つわけですが、この間に亡くなったアメリカ兵の数は約 7 千人と言われております。で、この 7 千人という死者の数とクリント・イーストウッドの映画を思い出しながら、私はもう一本の似たようなロシア映画を思い出したわけです。

日本の題名では『アフガン』(ロシアの原題は「第 9 中隊」)という映画で、監督はフォードル・ボンダルチューク。『戦争と平和』(1965 年)という有名な映画を作ったセルゲイ・ボンダルチューク監督の息子です。プーチンご推薦映画ということで、人によっては嫌いだと言う人もいるのですが、私はショックを受けた映画です。これはソ連時代のアフガニスタン戦争(1979 年～89 年)で、第 9 中隊という部隊がイスラム武装グループと遭遇して壊滅するという非常に反戦的な映画でした。クリント・イーストウッドの『アメリカン・スナイパー』の世界と、このボンダルチューク描くアフガン第 9 中隊の世界というのが非常に似通っているわけです。それまでの超大国が文明的なある種の力を示そうとして意気揚々とイスラム世界に入っていくけれども、しかしそこで遭遇するのは全く違った世界で、憎悪と悲しみ、ストレスの中で、兵士たちは次々と倒れていく。

## アメリカ社会のフラストレーション

トランプ氏がなぜあれほど人気を得たのかという、ミシガン州だとかウィスコンシン州だとか、本来は民主党の支持基盤で、かつて豊かだった地域の貧しい白人青年たちが、今は戦争に行く以外に道が無い。行ってみると、それほど多くないとはいえ遺体となって帰って来る者がおり、それがボデイブローのように社会心理に影響を及ぼしていく。今言われていることは、アメリカの白人男性の自殺率だとかアルコール依存度だとか、一種の社会病理の高まりです。こういう話を聞いて、私はちょうど 20 数年前のロシアだなあと思っただけです。

ソ連崩壊の頃(1991年12月)、ロシア人男性の平均余命は、それまでのソ連時代の64歳から57歳にまで下がった。平均余命が50歳台という状態が90年代いっぱい続きました。そういう社会的なフラストレーションというものが、逆にプーチン政権を生み出したのではないかと思っておりますが、同時に今のアメリカのトランプ現象の背景にあるのは、やはりこのアメリカ社会の変化ないし変質ではないかと思うわけです。かつてのアメリカの輝きとその裏側で起きていたことがいよいよ見えてきた。ご案内の通り、今年にはイギリスが Brexit (ブリグジット) という形で、6月の国民投票でEU統合からの離脱を選択しました。イギリスの変化に続いて、今度はアメリカが予想外の展開を見せている。

今年93歳になられたヘンリー・キッシンジャー博士(元国務長官)、彼は多分トランプ氏のブレインの1人ですが、そのキッシンジャーさんや政治学者のイアン・ブレマーさんは、今日のアメリカの国際的な影響力の低下を「G ゼロ」とか、「世界の無秩序」といった言葉で呼んでいますけれども、こういうある種の世界史的な転換とでも言うべき状況が生まれている。日露関係においても60年ぶりに新しい転換が起きている。私はこれもその世界史的な転換の一環ではないかと思えます。

## NATO 東欧拡大と「文明の衝突」

日露関係の問題に進む前に、もう一点、クリントンのことも話しておきたいと思えます。日本の国際政治の専門家たちは、今回の大統領選挙の結果を見て、クリントンが体現していたリベラル派のグローバリズムがなぜ支持されなかったのか、なぜあれほど人気が無かったのかということを書いてきたわけです。私がクリントンと聞いて思い出すのは、ヒラリーではなくビル・クリントン政権の時(1996年)に、クリントン氏が大統領選挙もかねてポーランドに行って、「NATO(北大西洋条約機構)の東方拡大」ということを主張したことです。NATOの東方拡大が、その後の東欧あるいは旧ソ連をめぐるロシアと欧米の争い、最終的には今日のウクライナ紛争にまで至るわけですが、当時はNATOが東方に行く必然性は

誰も感じていなかった。これはどういう理由であったかと言うと、実はアメリカという国の理解にも関わっており、今度のトランプ氏の一連の行動を理解することでもありますが、アメリカというのは移民の国です。移民の中でも東欧移民の影響力というのはアメリカのヨーロッパ政策や旧ソ連との関係では重要であって、1000万人以上のカトリックのポーランド移民たちの票がどっちに動くかというのが当時大きな問題でした。簡単に言うと、二期目を狙うビル・クリントン大統領は、この1000万の票がほしいためにNATOの東方拡大ということを行うようになったわけです。

NATOが西ヨーロッパから東欧社会に拡大していくと、ロシア・旧ソ連との関係において、ソ連邦はすでにないし、ワルシャワ条約機構ももうないわけですが、今度はかつての冷戦のイデオロギー対立ではなくて、一種の宗教的な対立軸、「文明の衝突」が現れるようになります。

同じスラブ人なので、ポーランド人がしゃべる言葉とロシア人がしゃべる言葉というのは、よく聞いてみると、東北弁と広島弁ぐらいの違いしかありません。にも関わらず、両者には非常に重要な違いがあって、それは何かと言うと、ポーランド人はカトリックなのでラテン文字を使い、これに対しロシア人は東方正教なのでキリル文字を使っている。したがって、この正教とカトリックとの間に、言葉は耳で聞くとそれほど違わないにも関わらず、ある種の差が生まれる。この差が大きな意味を持つわけです。当時、1996年にサミュエル・ハンチントンという有名な国際政治学者が「文明の衝突」という本を著して、これから冷戦終結後の世界においては宗教紛争が重要になる。文明と文明が接する境界での紛争が激化すると指摘しました。そのころ私はこの人の意見をそれほど高く評価しなかったのですが、今になってみるとこれはまったく正論であって、現在のウクライナ紛争、あるいはポーランドとロシアの対立、アメリカにおけるポーランド移民の票がクリントンに行くのかトランプに行くのかといったことを含めて、実はこの「文明の衝突」に関係するんだということに遅まきながら気がついたわけです。

今起きているのは、まさにビル・クリントン氏が始めたNATOの東方拡大が、オバマ政権になって最終的にウクライナ紛争を呼び起こしてしまったということではないかと思えます。クリミア併合はその結果であって、原因ではありません。

日本では、「国際法に違反してプーチン大統領が国境線を力で変えるのはけしからん」という議論ばかりで、「クリミアは誰のものか」といったことについてはなかなか議論にならないわけですが、私は現在のヨーロッパで起きている紛争、宗教対立、これらを見ずして、これを巡るアメリカの国内世論を理解することはできないと思えます。アメリカにロシア正教徒が何万人いるか調べてみるとだいたい10万人ですね。これに対してカトリック系のポーランド人は1000万人以上で

す。カナダには 3 番目の移民としてウクライナ西部のカトリック系ウクライナ人が大量にいる。北米の世論では、ロシアとカトリック世界がぶつかる話になると、どうしても身びいきというか、ロシアの方が不利になってしまうのです。

### 「リベラルな介入主義」の誤算

プーチン大統領は最近ある会議で、「ヒラリー・クリントン候補から言うとロシアは悪人になっているけれど、われわれはそんなにアメリカに影響力を持っていない」と発言していましたが、逆に言うとこのアメリカ大統領



選挙では、プーチン・ロシアに賛成なのか、反対なのかということがある種ゴーストのような形で選挙の一つのテーマとなっていたわけです。そしてトランプさんがロシアとの和解のようなことを言うと、とくにリベラル派の国際政治学者たちから『けしからん!』という反発が出ておりました。

ウクライナ危機以降の国際政治関係の変化、今年になって現れたアメリカとイギリスの影響力の変容、あるいはミスター・クリントン以来のアメリカの主流であった「リベラルな介入主義」とでもいうものが、トランプ大統領の登場によって流れが変わっていく兆候が現われています。

逆に言うと、この 20 年間ほどの欧米の主流の考え方はミスター・クリントンに代表されるリベラルなグローバルゼーションだった。これは旧ソ連、ロシアとの関係では「非常に強い関与」ということになるわけですが、その現れとしての NATO 東方拡大がウクライナ危機を生み出した。それだけでなく、この同じ一神教の流れの中からイスラム世界との対峙というもう一つのアメリカの大きな関与が、これまたターニングポイントを迎えている。そういったアメリカの全体的な方針転換とでもいうべきものが今現れているのではないだろうかと思うわけです。

### 国境線は平和的に変えられる?

先週末(11月 13日)の日経新聞にキッシンジャー元国務長官の長いインタビューが載っていました。その中で、「(21世紀の国際システムにおいて)何がルールになるのかについて同意を作り上げなければならない。そのルールとは『単なる国境』は変わり得るという考え方かもしれない。そして(各国間の)交渉で、それ(ルール)も修正されなければならない

ない。」と言っておられます。キッシンジャーさんは 1970 年代の国際政治のチャンピオンで、ニクソン政権の米ソ緊張緩和(デタント)の理論家ですが、彼が主導して作った「ヘルシンキ宣言」(\*注1)には、「国境線は平和的な合意によって変えることができる」と謳われています。実はこの発言は、現在のクリミア問題とクリール諸島、日本の領土問題にも絡むことだと私はこのキッシンジャーさんのメッセージを理解したわけです。その意味で、日露関係の進展の背景には、非常にグローバルな世界史的な転換というべきものがあるのではないかと私は見えています。

ここで少しだけ付け加えておくと、東欧社会ではトランプ氏がアメリカ大統領に当選して以降、ブルガリアの大統領選挙で「親口派」とされるルメン・ラデフ氏(元空軍司令官)が勝利しました。ブルガリアはロシアと大変いい関係の国ですが、面白いことに第一次、第二次の二つの世界大戦では、ロシア(ソ連)と戦っているのですね。NATO 東方拡大の中で 2004 年にブルガリアも NATO に加盟したので、ロシアの天然ガスを、ウクライナを回避してヨーロッパに輸送するパイプライン(=サウスストリーム)の建設には、アメリカの圧力もあって協力してきませんでした。これが今回の選挙で大きく変わりました。モルドヴァでも同様に親ロシア派の社会党党首イゴリ・ドドン氏が大統領に当選しました。

ウクライナでは、ロシアに近いと目されたトランプ政権が誕生したことで、西側から見捨てられるのではないかとというある種パニック的な雰囲気すら見えています。しかし私は、同時にもしかしたらトランプ氏がプーチン氏とうまく話ができる状況になれば、ウクライナ危機についても国境線画定の問題が新しく出てくるのではないかと考えております。

\*注1「ヘルシンキ宣言」;アメリカ、カナダ、ソ連を含めたヨーロッパ 35 カ国の首脳が参加した 1975 年の全欧安全保障協力会議で採択された最終合意文書。国家主権の尊重、武力不行使、国境不可侵、紛争の平和的解決、内政不干渉、人権と諸自由の尊重などの原則を確認し、信頼醸成措置の促進など、米ソ冷戦時代の東西対話と緊張緩和に大きな役割を果たした。

### 若返るプーチン政権の人事政策

アメリカの話はこれくらいにして、次に「今ロシアで何が起きているのか」ということについて、この数か月間私が見聞きしたこと、研究したことをお話して、さらに今年は日ソ国交回復 60 周年にあたるわけですから、その関連も含めてプーチン訪日を前にした日露関係について申し上げたいと思います。

プーチン大統領を囲む国際会議にヴァルダイ・クラブという国際会議があります。これは 2004 年から毎年開かれており、今年で 13 回目を迎えるわけですが、プーチン賛成派も反対派も、またロシア人もヨーロッパ人やアジア人も含めた 200 人ぐらいの会議体です。日本からは私を含めて 2 人が

今年10月27日にソチで開かれた会議に参加しました。毎回プーチン大統領が演説するわけですが、今年の基本的なポイントは、アメリカはロシアを脅威と見なしているが、ロシアは欧米との正常化を望んでいるというメッセージを伝えたことでした。このときアメリカのクリントン陣営に近い専門家も来ていて、『次の大統領選挙ではミセス・クリントンが大統領になる』と思わず断言してしまったのですが、面白いことにロシア側もそれは当然だというふうに反応していました。その意味で、今はロシアでもアメリカでも国際政治の枠組みをどう組みなおすのかということについて、大変面白いプロセスが始まっているのだらうと思います。

今回の会議で感じたことは、このところ言われていたプーチン大統領周辺の右左対立というものが、それほどはっきりとしなくなったことでした。プーチン政権の最近の人事異動を見てみると、プーチン大統領を支える最も重要な機構である大統領府の長官にアントン・ヴァイノさんという44歳の元外交官が今年8月から起用されました。ヴァイノさんは東京のロシア大使館でパノフ前大使の秘書をやっていた方で、もちろん日本語堪能な知日派です。この人がプーチン大統領を支える右腕のような役割をしているわけです。その前の大統領府長官はKGB系のセルゲイ・イワノフさんでしたが、彼はいわゆるシロヴィキという言葉で呼ばれる人脈の政治家です。シーラ(сила)というのはロシア語で力、ここから転じて、シロヴィキ(силови́к)というのは「ロシアの強力官庁」と訳すのですが、軍とか警察、治安機関、こういったグループの人たちを指しています。プーチンさん自身もKGB出身で、シロヴィキに属する経歴を持った政治家であることは周知の通りですが、今回、シロヴィキ・グループの人たちはあまり目立ちませんでした。一方リベラル派では、たとえば数年前に亡くなったボリス・ネムツォフ(エリツィン時代の政治家で第一副首相)もヴァルダイの参加者だったわけですが、リベラル派も目立ちませんでした。その意味では、プーチン政権の人事政策は右でもない左でもない。リベラルかナショナリストかといった区別よりも、一種のテクノクラートの人たちがプーチンの周囲を固めはじめている、そして若返りが起きているということだらうと思います。

#### 第4次産業革命とプーチンの「東方シフト」

外務大臣のセルゲイ・ラブロフさん、前の財務大臣で経済専門家のアレクセイ・クドリンさん、こういう人たちもいます。クドリンさんはプーチン系ですが、2011年に「あまりに軍事化しすぎた予算は問題だ」と言って財務大臣を辞めてしまいました。このクドリンが4月に戦略策定センターの所長になり、2030年までのロシアの経済政策を立案する責任者になっています。彼のシナリオでは、第一に、これからエネルギー価格は上がらない。原油価格は1バレル40ドルから60ドルの間に留まるだらうと言っています。ご案内のとおり数

年前までは1バレル100ドルから150ドル近い高値で、その結果、産油国であるロシアやサウジアラビアは大いに潤って、一種のバブル景気だったわけです。

ところがウクライナ紛争のころから原油価格は50ドル以下に下がってしまった。これは、一つにはアメリカでのシェールガス革命の結果です。トランプさんの孤立主義を支えているのは、アメリカが国内消費の2割ぐらいを中東から買っていた石油ガスがもういらなくなったという現実です。中東の産油国からアメリカの方にエネルギー価格の決定権が移り始めているわけです。今、エネルギー価格が下がっている理由は何かというと、実はこのアメリカに対抗して、ロシアとサウジアラビアが組んでシェール潰しをしているからで、それでこの1年間原油価格は30ドルから50ドルくらいで動いているわけです。にも関わらず、クドリンは60ドル以上にはもう戻らないと言っているわけです。

もう一つ、クドリンはロシアの人口問題を分析しています。ロシアの人口は、男性の平均余命が低くて、毎年約70万人づつ減っていく時代がしばらく続きました。今は逆に若干ですが増え始めています。政治が安定してロシアの女性たちが子供を産み始めている。子供手当の充実も背景にあります。しかし、にも関わらずクドリンは「2030年ぐらいまでに、ロシアの稼働労働人口は10%減になるだらう」と予測しています。ロシアの人口は日本より少し多いわけですが、ロシアもこれから人口減を迎えるということです。ロシアが開発に力を入れようとしているロシア極東地域は、面積は日本の17倍もありますが人口は630万人程度しかいない。極東地域の人口もこれからそれほど増えることにはならないということです。

もう一つ指摘しておく、ロシアが望んでいるのは経済の「脱エネルギー化」ということです。エネルギーに代わる輸出産品をロシアがどれだけ作れるか、誰と協力してそういった製品を作るかということがこれからの課題です。クドリンは、「現在、ロシアの輸出産品のうち10%程度しかハイテクを使った高品質の商品がない」、「高品質商品の比率を25%から30%まで高める必要がある」と言っています。これは、最近日本の新聞でもよく取り上げられている「第4次産業革命」の推進です。IT(情報技術)だとかIoT(Internet of Things/モノのインターネット)、ロボット化、AI(人工知能)といった情報技術を応用した経済の高度化と効率化に対応しきれてないという認識が、今のロシアを突き動かしています。

そしてこれに関連して、プーチン・ロシアのもう一つのアジェンダ(行動指針)がアジア・シフト＝「脱欧入亚」です。ヨーロッパはエネルギー輸出がこれ以上望めない。さらに中東の移民問題や政治危機でヨーロッパの影は薄くなっている。これに対し、超大国となった中国、さらにインド、あるいはインドネシアといった新しい経済大国が台頭し、成長著しいア

アジアには旺盛なエネルギー需要がある。このアジア地域で、ロシアがエネルギーを武器にどう経済協力を拡大していくか。これがプーチンのアジア・シフトの一つのポイントです。そういった国々の中で、第 4 次産業革命のロボット化だとか、人工知能といった分野でパートナーを探すとすると、おのずと日本に対する関心がプーチン大統領とその周辺の人たちの間で高まっているのだらうと思います。

### ロシア側に響いた「安倍 8 項目提案」

では、安倍政権はプーチン・ロシアとこの間どのように話し合いを進めているのか。その点で、今年 5 月のソチの日露首脳会談が私は非常に重要だったと理解しています。ソチの大統領別邸で、プーチン大統領と安倍総理が話し合ったわけですが、そこで日本側は対露協力「8 項目提案」というものを出しました。今回の提案でとくにロシア側に響いたのは、エネルギー価格の低下と第 4 次産業革命の進展の下で、一般的なエネルギー協力などだけでなく、日本がいかにかロシア極東経済の現状にマッチした協力プログラムを作れるかという視点で提案がなされたということです。

写真は、日揮という日本のエネルギー企業がハバロフスク郊外の 5 ヘクタールぐらいの野菜工場、温室栽培で野菜を作っているところで



です。これまでは中国の企業が極東で中国の安い労働力を使い、農薬と肥料を大量に使って農業生産してきたのですが、これがあまり健康によくない。ロシア人たちも健康にナーバスになっていて、健康寿命の伸長を図りたい、長生きしたいという当然の欲求を持っています。その中でこの工場のつくる温室栽培野菜は、肥料や農薬と無縁で健康的にととてもいいと評判で、これから新しいタイプの農業をロシア極東で作るものとして期待されているわけです。

19 世紀にはロシアは世界の「穀物工場」でした。ちょうど来年 2017 年がロシア革命 100 周年ですが、ソ連の社会主義というのは簡単に言うと、農業の犠牲のもとで工業化を強行し、西側に対抗する軍事産業を作るといのがスターリン、ブレジネフの巨大なプログラムでありました。その結果、経験豊かな農民たちがロシアからいなくなりました。逆に言うと、ここにきてようやくロシアは農産物を再び輸出できる環境が整い始めているわけですが、日本の企業体の農業協力が、ロシア農業の発展に非常に大きな刺激になっているわけです。そのほか、極東の産業振興、輸出基地化だとかエネルギー、先端技術協力だとか、第 4 次産業革命的な

新しい質を見据えたプログラムが提案されています。そういうことで、日露関係がこの 5 月以降進んできているわけです。

### すれ違いの連続だった過去の領土交渉

領土問題についていうと、2015 年の暮れぐらいから話が進み始めて、5 月のソチでは 35 分間、プーチンさんと安倍さんの二人だけで話をしました。そして今年 9 月の 2 日と 3 日、ウラジオストクで「極東経済フォーラム」というもう一つの重要な国際会議が行われました。これは、ロシアがいかにかアジアに出ていくかという問題意識で 2015 年から始まった国際フォーラムです。2015 年は戦勝 70 周年ということで、中国の国家副主席がメインゲストだったのですが、今年の主役は日本の安倍首相と韓国のパク大統領でした。何よりもプーチン大統領がシンゾウ・アベと何度も名前を出して、両者の蜜月関係を演出しました。安倍総理は、このとき「道筋が見えてきた」と言ったわけですが、ここでも 55 分間二人だけで話をしたということでもあります。

領土問題については、戦後何回かチャンスがありました。1956 年の国交回復交渉(日ソ共同宣言)、1973 年の田中角栄総理が訪ソしてブレジネフ書記長と行った首脳会談、それから、1991 年の海部・ゴルバチョフ会談などです。しかし、冷戦時代は日本とソ連のベクトルが反対に動いていて、方向の違うブランコのようなもので、手をタッチしたと思ったら別の方向に別れてしまう。首脳会談の度に、中東の危機や東欧の危機とかが重なって、なかなか日ソが同じ方向に動くチャンスがなかったわけです。

これに対し、冷戦終結後のチャンスは、1997-98 年の橋本・エリツイン関係が一つのピークでした。先ほど、96 年のクリントン政権の NATO 東方拡大が米ロ関係を悪化させたという話をしましたが、日ロ関係に関しては逆だったわけです。逆に言うと、当時クリントン大統領は橋本総理に対して、NATO 東方拡大でロシアを西から難しい立場に置くものですから、東からは日露関係でソフトに出てくれとヒューストンサミットで言うわけです。橋本総理はこれをうまく使って、いわゆるユーラシア外交という新しいプロジェクトを立ち上げて日ロ交渉を進めました。しかし、これがうまくいかけた時に時間切れとなって、何よりも 98 年の経済ショックでエリツイン政権が大きな打撃を受けて頓挫してしまいました。この時は、「国境線画定」ということを日本政府が提案して、1855 年の日露親善条約の規定と同じ得撫島と択捉島との間に線を引くというアイデアで、川奈提案というものを出したわけですが、結局うまくいかなかった。『2000 年までに平和条約締結』と時間を区切ってしまったことも一つの問題だったわけです。

### 交渉に期限を設けるのは有益ではない

今年 12 月 15 日に山口県長門市で行われるプーチン・安

倍会談について言うと、重要なことは、すでにこれまで何回かの二人だけの会談で何らかの合意があるはずなのですが、これが全く漏れてこないことです。これまでの領土交渉の大きな問題の一つは、情報がかなり洩れて、どっかでショートして、結局お互いの不信に終わってしまったことです。今回はその轍を踏まないということなのでしょうが、明日 11 月 20 日にはリマの APEC 首脳会議で安倍さんとプーチンさんがまた会いますので、トランプ政権誕生を踏まえた両者の体温というものが多少はわかるのではないかと思います。

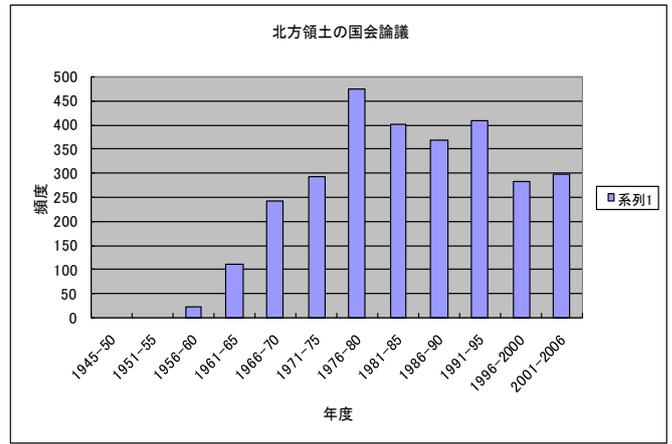
10 月末のヴァルダイ会議では、次のようなやり取りがありました。もう一人の日本人の方が、「今後 2 年～4 年の間で日露平和条約が締結される可能性はあるか」という質問をしたのですが、プーチン大統領はやや不興だったようで、「期限を設けることは不可能であり、それどころか有害でさえあり得る」、「中国との国境画定問題の解決にわれわれは 40 年もの時間をかけた。日露関係は中国との信頼度に比べてまだそこまで至っていない」と答えました。私に言わせると、「40 年ではなく、日本は 60 年以上やっている」ということですが、私はラブロフ外相に対して次のような質問をしました。平和条約というのは、そもそも戦争終結時の講和条約の別名ですが、今両国がやろうとしているのは、プーチンさんの言葉を借りれば、『勝者もなく敗者もない解決』ということです。これは 9 月の極東経済フォーラムの直前に西側の通信社に対してプーチンさんが話した言葉です。したがって、「講和条約＝平和条約ではなく別の名前の条約を結んでもいいのではないかと聞いてみたわけです。ラブロフさんの口から出た答えは、やっぱり「第二次世界大戦の結果を踏まえた条約であるべきだ」というかなり強いメッセージでした。

### サンフランシスコ講和条約で千島を放棄

係争中の島について、これを「引き渡す」のか、「返還する」のか、実はプーチンさん自身も言葉の使い方が少し揺れているのですが、基本的には 1956 年の日ソ共同宣言第 8 項を踏まえて、ロシアは「引き渡す」という言い方をしています。「引き渡す」というのは、要するにいったん自分のものになったものを渡すという意味です。

この 60 年間、なぜわれわれは北方領土問題についてロシアと合意に達することができなかったのか。

この「北方領土」という言い方ですが、私は日本の国会でこの言葉が何回使われたか表を作ってみました。そうすると、北方領土という言葉は実は 1950 年代末までほとんど使われてないのですね。では、これは誰がどうやって作った言葉なのか。「国後、択捉、歯舞、色丹の 4 つの島は日本固有の北方領土です」という言い方は、いつ誰がどうやって作ったかという、これは 1956 年の日ソ国交回復交渉の渦中で作られたものなのです。



1955 年の 1 月 25 日、文京区音羽の鳩山一郎首相の邸宅に、ソ連の経済部の代表がやってきました。当時、ソ連と日本の間には外交関係がまだないものですから、東京に駐在していた経済代表がメッセージを届けたわけです。それから日ソ国交回復交渉が始まります。

1951 年の 9 月に日本はサンフランシスコ講和条約を締結します。当時は 1950 年 6 月から始まった朝鮮戦争のさなかです。この講和条約は、米英など西側多数派との講和条約で、毛沢東の中国は会議に呼ばれませんでした。ソ連は会議には参加しましたが、署名しませんでした。しかしこの時、領土問題について非常に重要な決定がなされるわけです。簡単に言うと、戦前に日本の領土であった台湾とか朝鮮半島、千島列島などを、誰に引き渡していいか決められなかったわけです。台湾については、イギリスとアメリカとの間に温度差がありました。イギリス外交はリアリズムですから、毛沢東の共産党政権＝中華人民共和国を認めてしまえというのが最初からのポジションでした。アメリカ東部のエリートもその方向に行きかけるのですが、その前に朝鮮戦争が起きてしまい、アメリカは台湾の国民党政権が正統だと主張する。したがって台湾をどっちに引き渡すか決められなかったわけです。朝鮮半島については北の義勇軍として参加した中国軍と国連軍という名前のアメリカ軍とがぶつかりあっていましたので、これもまた決められない。ここに、アメリカとイギリスの間にカナダという非常に外交的に賢明な国がありまして、「では帰属先を決めずに、日本に領土の放棄だけをさせよう」ということになりました。そして、その結果として南樺太と千島列島についても帰属先を明記せずに日本は放棄だけをするという表現になったわけです。

### 1955 年保守合同の舞台裏

もう一つ重要なポイントは、このサンフランシスコ条約は、すぐに署名しなくても 3 年以内に態度を変えて署名すれば同じ効果が得られるという点です。ソ連からはグルムイコという、その後ミスター・ニエツと呼ばれることになる有名な外交官が参加していました。もしソ連が 3 年以内に署名していれば同じ効果が得られたわけです。そうすると日本とソ連(ロシ

ア)との領土問題は、もしかしら今とは違っていたかもしれませぬ。しかし、3年間が経過すると、それぞれの未署名国は新しい平和条約を個別に結ぶことができるという規定になっていました。ですから、1952年4月に講和条約が発効して日本は独立したわけですが、それから3年後の1955年4月以降、日本は中国、ソ連、韓国、北朝鮮と個別に平和条約を結ぶことになりました。アメリカはこのことをあらかじめ予測して、それに対するセーフガードを作りました。

何かというと、1955年の民主党と自由党の保守合同です。アメリカが懸念していたのは、当時は朝鮮戦争がまだ終わっていないものですから、中国は国連軍(アメリカ軍)の敵なんです。したがって日本が、とくに關西の繊維資本あたりが中国との和解に動いてもらっては困るというのが本音だったようですが、1954年12月に鳩山一郎内閣が成立して、当時は民主党の少数派政権ですが、これがカウンターパートになろうとしたときにアメリカは新しい方針を決めます。簡単に言うと、「保守合同」をやってアメリカ軍基地がある日本との関係を安定化させるということでした。われわれはつい数年前に沖縄の普天間基地を少なくとも県外移転させるとした民主党・鳩山由紀夫政権を日米の保守派が結束してこれを阻んだのを見たわけですが、鳩山一郎内閣がもし社会党と組んで、そういう「中立政権」で平和条約を結ばれては困るというのが、実は平和条約交渉をめぐる国際政治の裏表なんです。だから、いわゆる『55年体制』と言うと、われわれは自民党と社会党が「1か2分1」でという話を浮かべますが、それは国内の話であって、実は国際的なメカニズムが同時に働いていたわけ。民主党系の鳩山派に対して、自由党系の吉田派、池田派(のちの宏池会)などとの間で、ロシアに対する温度差、あるいは日本とアメリカとの安全保障について温度差がありました。乱暴に言うと、鳩山派は対米自立で独自の軍備を持ちつつソ連とも和解を図るという方向で、吉田派は日本は軽武装・親米で行くという考え方でした。そして、この両者の間で妥協が成立します。その時に間に入って調整したのが岸信介という政治家であって、その孫である安倍さんが今、日ソ平和条約をやろうとしているということです。

繰り返すと、サンフランシスコ講和条約から1955~56年の日本の国内変動と日ソ平和条約交渉、対ソ政策は密接に絡み合っていた。そして、平和条約交渉で日本があまり突出しないようにと埋め込まれた障害物が、この「北方領土」という4つの島の返還の話なのです。

### 下田条約局長の新解釈で「北方領土」が誕生

1953年3月にスターリンが死去して、後任の共産党第一書記にフルシチョフが就くわけですが、1956年のスターリン批判でフルシチョフは権力を完全に掌握します。

日ソ国交回復交渉は、鳩山系の外交官(元事務次官)で

衆議院議員でもある松本俊一全権代表と、東京でソ連大使もやったことのある駐英ソ連大使のヤコフ・マリク全権代表との間で、ロンドンで1955年6月から開始されました。フルシチョフの指示で、『二島だったら返還に応じてよい』とマリクが松本に伝えるのが8月初めです。ところがこの重要な情報は、鳩山首相の耳には達しませんでした。なぜかと言うと、外務大臣の重光葵は、外交官のプロ中のプロであっただけでなく、総理大臣の椅子も狙っていた保守派の政治家です。『鳩山のような外交の素人にはやらせない。日ソ交渉は自分がやるんだ』というのがこの人の考え方でした。さらに親米反ソの吉田派がいろいろな妨害を行います。「保守合同」の動きがそのころから始まるものですから、結局、内政と外交の与党内対立に翻弄され続けたのが日ソ領土交渉の経過でした。

そういった状況下で、では誰が北方四島という話を作ったのか。サンフランシスコ条約で日本は千島列島を放棄したとかつて言われておりました。四島全体で、歯舞、色丹の面積は7%ぐらいで、国後、択捉が93%なのですが、それまで国後、択捉は南千島と呼ばれていて、日本はサンフランシスコ講和条約で千島列島を放棄していますので、1955~56年までは南千島も同条約で放棄したというのが、講和条約締結時の国会での西村熊男外務省条約局長の見解でありました。日本という国は、外交について最高の権威者は実は条約局長の発言なのです。

で、鳩山内閣の時の外務省条約局長は下田武三という有名な外交官です。外務省退官後、野球コミッショナーや最高裁判事を歴任した外交官ですが、この下田武三氏こそある意味で戦後日本の冷戦時代最高の外交官でした。彼だけがソ連大使とアメリカ大使の両方をやりました。今の安倍外交で少し変わってきていますが、日本外交の司令塔はつい最近までは駐米大使でした。事務次官をやった後、駐米大使になる人が日本外交の司令塔だった。

下田は、「モスクワが二島を提案してきている。もしかしら二島で鳩山が妥協するかもしれない。」と睨みます。実際、ソ連共産党第20回党大会に出かけるマリクに対して松本俊一が『二島ではちょっとまずい。保守合同で自民党ができて四島返還と言っているから、何とかもう少し考えてほしい』という話を第二次ロンドン交渉で行います。これが56年2月のことです。マリクはこれを持ってモスクワにもどりますが、結果はゼロ回答でした。その回答を見て、下田条約局長は「北方四島は日本固有の領土である。国後、択捉、歯舞、色丹はサンフランシスコ条約で放棄した千島列島には入らない」という『新解釈』をするのです。これが北方領土という言葉の正式な意味であり起源です。

彼はこのアイデアをどこから持ってきたかと言うと、実は沖縄と絡んでいました。ご案内の通り、沖縄・琉球諸島と小笠原諸島はサンフランシスコ講和条約でアメリカの信託統治



領とされていきました。したがって、アメリカはソ連が二島返還を言い出したのでびっくりしたわけです。同時にこの頃、日本では「南方同胞援護法」という法律が作られて、沖縄、小笠原諸島は「南方領土」だという位置づけがされる。その反射効果で、下田武三はこの言葉を使って、「国後、択捉、色丹、歯舞は千島列島ではない。『北方領土』である」という新解釈をしたわけです。

### 「二島で手を打つなら沖縄は返さない」

日本側が四島返還に舵を切るとソ連側も硬化します。フルシチョフは「せつかく善意で歯舞、色丹を引き渡すと譲歩したのに、日本側はさらに『4島全部返せ』と言う。これは認めない。」と怒ります。結局そこから平行線が始まるわけです。実は当時、フルシチョフが追い込まれていたことも事実なのです。彼が始めたスターリン批判と民主化によって、東欧だけでなく中国でもいろいろな動きが出てきました。つい最近分かったことは、北朝鮮でも金日成を毛沢東派が追い落とそうとする動きがあった。こういった内外のスターリン批判の波の中で、フルシチョフは自分が進めた民主化や領土の譲歩が逆に自分に跳ね返ってくるのではないかと恐れて、そのあと非常に態度を硬化させたわけです。

「二島か四島か」という平行線が続く中で、今度は日本から重光葵外相がモスクワに乗り込んで、56 年 7 月～8 月に平和条約交渉をやるのですが、ソ連側は動かない。結局、重光は『モスクワは固い』と判断して、一転、四島を降ろして二島で妥結しようと東京に要請するのですが、鳩山派までこれは重光の裏切りだと言い始めて交渉は行き詰まりになります。

それだけでなく、ちょうどこの時スエズ危機(\*注2)が起って、ロンドンの対策会議に重光は帰路立ち寄ります。そこでアメリカのダレス国務長官と会って、「二島で日ソ平和条約を締結したい」と言うと、「それならアメリカは沖縄を返さない」と脅されるのです。これはサンフランシスコ条約第 26 条に法的根拠があるのです。同 26 条は、「日本国が、別の国とこの条約で定めるより大きな利益を与える平和処理を行った時は、それと同一の利益を条約当事国にも及ぼさなければならない」と規定しています。

ですから、システムとしてのサンフランシスコ体制の中に、やはり冷戦のメカニズムがはめ込まれていた。この枠内でアメリカ外交は動いていたし、冷戦の時代にはこのメカニズムが変更されることはなかったということです。したがって北方領土をめぐるいろいろな交渉が、その後、田中内閣の時や福田内閣の時にもありましたし、また 1980 年代にはソ連側でもグロムイコたちが日本との和解を考えた時期があったのですが、結局、日ソ交渉は進まなかったわけです。

\*注 2; スエズ危機/エジプトのナセル大統領が 1956 年 7 月にスエズ運河を国有化したことに端を発した第二次中東戦争(1956 年 10 月～57 年 3 月)

### 国内の政治力学と冷戦のロジック

1955 年～56 年の日ソ国交回復交渉とその結果締結された日ソ共同宣言を見ていくと、今日まで続く基本的な問題が全てこの中に入っているのです。

第一に言えることは、56 年共同宣言で解決が先延ばしされた領土問題で、二島か四島かというのは実は日ソ紛争、非常に国際的な背景のある日ソ紛争であるということです。日本国内のあるいは自民党という政党の中の論争という側面があります。二番目に、日本を必要以上に社会主義圏に近付けないという冷戦期のロジックがあった。逆に言うと、冷戦が終結した後には大きなチャンスが出てきたはずなのですが、今度はナショナリズムという別の問題があって、なかなかうまくいかなかったということです。

というわけで、日ソ国交回復交渉は、最終的には 1956 年 10 月に鳩山一郎首相が病身を押ししてモスクワを訪問し、日ソ共同宣言が締結されることとなります。当時、自民党の実力政治家であった河野一郎農林水産大臣が鳩山に同行して、フルシチョフと直談判を繰り返して共同宣言をまとめていったわけです。そこで一つ幸運だったのは、最初ソ連側が準備した文書の中に「領土問題を含む平和条約交渉を継続する」という一文がありました。鳩山訪ソの 1ヶ月前に松本とグロムイコがまとめた今後の交渉を取りきめた往復書簡にも同じ記述がありました。これはソ連側が書いた下書きなのですが、フルシチョフはこれを見て「領土問題を含む」という表現を共同宣言から消させるのです。したがってソ連側からの理解で言えば、今後問題になるのは、共同宣言 8 項に「平和条約交渉締結後に引き渡す」とされた歯舞、色丹の二島だけということになります。これでもう日本の望みは絶たれたかに思われました。ところが、共同宣言の署名式の前日になって、フルシチョフが翌日の署名式に参加できないと言ってきた。理由は何かというといわゆる東欧反乱、ハンガリー動乱です。スターリン批判の影響で東欧で火が吹いた。これにソ連が武力介入するかどうかの重大な決断が迫っていました。フルシチョフは会議参加のため署名式に出られないのもう数日待つてほしいと言うのですが、日本側は待て

ないと断ります。したがって署名式にはブルガーニン首相とグルムイコ外相だけが出ることになりました。これに対し機転を利かせた松本俊一が鳩山と相談して、日本側はこの1ヶ月前に交わした往復書簡を公開して「領土問題を含む平和条約交渉を継続する」と解釈するがいいかとソ連側に確認します。これに対しブルガーニンもグルムイコも下書きを書いた当事者ですから、オッケーだと答えた。したがって日本は二島以上の要求が可能になっているわけです。ここに今の日本側の主張の根拠があるわけです。ですから、もしフルシチョフが署名式にいたとすれば、実は二島で終わっていた交渉なのです。非常に微妙なモスクワの交渉があって、それ以降ずっと問題が続いてきたということです。

### 絡み合うクリミア半島と千島列島

時間がなくなっていました。最後に一つだけ、ウクライナとの関係について触れておきます。私の考えでは、クリミア紛争と千島列島の問題は歴史的に常に絡んでいる問題であるということです。ロシア人およびロシア帝国にとってクリミア半島とは何か。クリミア半島の黒海を隔てた反対側にはトルコのイスタンブールがあるわけです。このトルコとロシアの関係が非常に重要なのです。歴史をたどると988年に、当時ギリシャの植民地であったクリミアでキエフ・ルーシのウラジーミル大公(=ボロジーミル)がキリスト教を受け入れた。その結果、キエフ・ルーシが受洗(=受洗)して、キリスト教国家になったわけです。キエフ・ルーシが北に進出してヴゴロド公国やモスクワ公国といったロシアの原型を形作っていくわけで、ルーシとは今のウクライナとロシアの共通の宗教的ルーツでもあります。このクリミア半島の受洗の場所がどこにあるかという、実はロシア黒海艦隊のセヴァストーポリ基地の隣なのです。われわれは宗教と軍事というものをあまり関係ないものと見がちですが、宗教の歴史と戦争の歴史というものはいろんな意味で絡んでいるわけです。

クリミア半島ではその後いろいろなことが起きます。モンゴルの襲来でキエフ・ルーシが滅び、やがてクリミア・ハン国ができます。その後、クリミア・ハン国はオスマントルコの支配を受けて、イスラムの影響下にはいります。モスクワを中心にロシア帝国が強大化するにつれ、今度はロシアやウクライナから攻撃を受け、18世紀末にロシア帝国に併合されました。イスラム教と正教というのは、一神教でつながりがあるのですが、宗教的に対立する。かつて「第2のローマ」と呼ばれたコンスタンチノーポリ(現在のイスタンブール)は、15世紀半ばまで東ローマ帝国の首都で、キリスト教世界の一つを中心でした。これがオスマントルコに陥落し(1453年)、イスタンブールと改名された。逆に言うと、クリミア半島は、イスラム世界に対する攻撃基地でもありました。ロシア帝国というのは「ロシア人の帝国」ではなく、「キリスト教の正教の帝国」です。黒海をはさんで目の前にあるのは自分たちの宗教的

な故地であるコンスタンチノーポリです。今やイスラムの都となった『第二のローマ』をいつかは奪還したいというのが帝政ロシアの一つの国家目的でもあったわけです。ロシア帝国はトルコと過去十数回戦争をしていますが、ロシア人からすれば、1855年のクリミア戦争というのは実は宗教戦争なのです。なぜなら、オスマントルコが押さえていたエルサレムの聖地管理権をフランスに売り払った。そしてイギリスがパワーポリティクスの見地から、あろうことにイスラム教のオスマントルコに肩入れした。「これはけしからん！」というのがクリミア戦争のロシア側の解釈です。そして、このクリミア戦争の最中にロシアは日本との国境線画定交渉をやったわけです。1855年、プチャーチン提督はアメリカ、イギリスの追跡をかくぐって伊豆半島の下田で江戸幕府と日露和親条約を結んだ。これはヨーロッパの大国であるロシアがアジアとの関係拡大に向かう1回目の試みでもありました。だから、クリミアというのは小さな問題ではありません。トランプさんはプーチンさんに「クリミア問題なんて大したことないよな」と言いましたが、そうではないのです。ロシア人の精神的歴史的な背景からいえば、ロシアが東に行くか西に行くかということを決めるのはクリミアなのです。

### ヤルタ秘密協定

現実には、それから90年後にクリミアで何が起きたか。スターリン(ソ連)、チャーチル(英国)、ルーズベルト(米国)の三巨頭がクリミア半島のヤルタで会談して、第2次大戦終結後の戦後体制を話し合い、その中で千島列島をソ連に引き渡すという秘密の取決めを行った。ドイツの敗戦は時間の問題だけれど、まだ抵抗を続ける日本を降伏に追い込むには百万人以上のアメリカの若者の血が流れる可能性がある。それを防ぐために、ドイツ敗北の3カ月後に対日参戦して170万の赤軍を極東に回してほしいというのがルーズベルトの要請でした。もちろん日ソ中立条約があったわけですが、スターリンはどうせ日本は負けると見ていました。これが1945年2月のヤルタ秘密協定です。これは1年後にジョージ・ケナンという冷戦期最高の外交官が秘密協定を暴露して明らかになりました。したがって、日本政府も1946年には千島列島がソ連に引き渡されることを知っていました。敗戦後、アメリカを中心とする占領軍によっていわゆるマッカーサーラインが引かれて、日本の統治区域が決められたわけですが、北方海域では知床半島の納沙布岬と歯舞群島の水晶島との間に線が引かれました。ソ連側はこのヤルタ協定と国連憲章をたてにクリール諸島はソ連のものになったと主張してきました。

### これが3回目の「東方シフト」

では、ロシアはなぜ今、日本との関係改善をやろうとしているか。ロシアはこれからアジアの国になろうとしています。

エネルギーの 9 割をヨーロッパに売っていた時代は終わったわけで、これからエネルギーを日本や韓国、インド、中国に出していきたい。ウラジオストクを自由港にして「東の開かれた都」にしたい。今、ロシアは 3 回目の「東方シフト」=脱欧入亜をやろうとしているわけです。

ロシア人たちはペレストロイカ以降ヨーロッパ人になろうとしたけれどなれなかった。西ウクライナのカトリック教徒たちから「おまえらはヨーロッパ人じゃない」と言われた。2014 年 2 月、ソチ・オリンピックの開会式の日、ウクライナの親口派政権が暴力的に、ロシアからすれば武力で倒された。これに怒ったプーチン大統領はおそらく即興的に、あるいは反射的に、クリミアをロシアに併合します。

クリミア半島は 1954 年まではロシア連邦、当時のソビエト社会主義共和国の一部でした。フルシチョフは地域住民の意思を無視して、ごく気楽に行政区分をロシアからウクライナに変えてしまいました。つい最近、初代ウクライナ大統領だったクラフチュークさんが面白いことを言いました。「クリミア半島はフルシチョフによってウクライナに押しつけられたんだ」というのです。ソ連からの独立 25 周年の日、クラフチュークは「ウクライナはもうクリミアをあきらめるべきだ」という言い方をしています。これは何を意味しているのか。現代史の歴史的事実としては、クリミアはロシア連邦に属していました。ウクライナ国家は国連の発足時からの加盟国で、ソ連時代にも 1 票の投票権を持っていた。したがって、1945 年の時点でクリミアは確かにウクライナの領土ではありませんでした。つまり、ロシアの言うことにも分があると見えなくもないわけです。

### 多極化世界の中での米口関係

これからトランプ・プーチン関係が良くなるかどうか。私は改善には向かうと思いますが限界があると思います。なぜならば、世界はイデオロギー対決の時代から、ナショナリズム、宗教対立の時代へと多極化しているからです。中東世界ではイランとサウジアラビアが大国で、イランは別としてサウジアラビア、イスラエル、エジプトといった国々は今までアメリカと良い関係をずっと持っていた。ソ連崩壊後は中東でロシアの影響力はなかったわけです。ところが今起きていることは、どこでもロシアの影響力が強まっている。エジプト、シリア、イラン、サウジアラビアまでロシアとの関係がよくなっているわけです。逆に、アメリカに対するサウジアラビアの恨みというのは、イラクのフセイン政権を押し潰してシーア派政権を作ってしまったことで、ほとんど当てつけのように、サウジアラビアはプーチン・ロシアとの関係改善に突き進んでいます。もう一つ、エジプトやシリア、こういった国ではもともと古いキリスト教の流れが残っています。古キリスト教は正教との親和性が高いので、今でも人口の一割は正教徒がいるということなのです。したがって、中東の宗教関係がいかに複雑であ

るかということを考慮に入れずして、これにイデオロギーだけで関与してしまうと、かつてアフガン介入でソ連も間違っただけども、現在のアメリカも間違っということになるということです。これが多極化世界の現状です。

### 国際関係の新しいメカニズムの模索

ロシアの東方シフトでつけ加えると、最近注目を集めている北極海ルートの開発も一つのポイントです。地球のエネルギーの 2 割が北極海にあると言われています。気候変動で年間 5 ヶ月間くらいは氷がとけ、北極海からベーリング海へ抜け、クリール諸島を通してオホーツク海、太平洋に出る航路が開かれるわけです。これは将来、ロシアとアジアを結ぶエネルギーの道になる可能性がある。同時にしかし非常に微妙な問題もあります。中国は「一帯一路」という現代のシルクロード構想を進めています。アイスシルクロードと呼ばれる北極海ルートの開拓にも力を入れ始めており、そうすると北極航路を中国の原子力潜水艦も通ることになるわけで、ロシアはこの点に非常に微妙な反応をしているわけです。

今、ロシアと中国との関係は極めて良いわけですが、ロシアは同時にやはりアジアの大国日本とも関係改善を進め、ある種のバランスを取ろうとしています。ロシアはおそらく 1990 年代にヨーロッパがドイツ問題を処理したような形で中国問題と対峙したいと思っているわけですね。冷戦終結で統一ドイツができた時、ドイツが EU 化するか、EU がドイツ化するかという議論があったわけですが、EU の枠で統一ドイツをグローバルにくるんだわけです。ロシアからすれば、ちょうどそのような形で、日本、韓国、ベトナム、インド、イランといった中国周辺の国との関係も改善して、圧倒的経済大国になった中国を包み込もうとしている。プーチンは「大ユーラシア・パートナーシップ」と言っていますが、これがうまくいかどうかは別として、壮大な構想ではあると思います。TPP もうまくいかなかったわけですが、これからしばらくはいろいろなパートナーをめぐる国際的な枠組みの議論が活発に行われるだろうと思います。

そういった関係から見ると、冷戦期の国境線をめぐる硬直した議論はもう卒業して、次の時代の新しいメカニズムを作りだしていくべきではないかと思うわけです。今、ガラガラと音を立てて変わりつつある世界の中で積み残した領土問題ですが、日ソ共同宣言から 60 年という還暦を迎えているわけです。還暦というのはリセットということですから、リセットして新しい日ロ関係の法的基盤に移りたい。次の時代の日ロ関係というものをどうやってわれわれはつくるか、いよいよ民間でも真剣に議論する時期が来たのではないかと思います。

(2017 年 11 月 19 日、東京、JIC ロシアセミナーでの講演録)

昨年11月16日、大阪日ロ協会結成40周年記念祝賀会が開催されました。以下は、祝賀会での記念講演(講師; 浅井利春氏)の要約です。大阪日ロ協会と浅井氏の了解を得て掲載させていただきます。(編集部)

## ロシア極東の経済と日本

浅井利春(元ウラジオストク日本センター所長)

ロシアには日本センターが7つあって、そのウラジオストク所長を2002年から6年間勤めました。日本センターは、ソ連崩壊後、ロシアの市場経済への移行を支援するために日本政府が1994年に発足させた組織で、ロシア政府や各地域の要望に基づいて専門家による研修講座や日本文化行事、ロシア企業関係者の訪日研修などの事業を展開しています。

2008年に日本にもどり、島根県のロシア貿易アドバイザーを6年間やりました。現在は、日本ウラジオストク協会の事務局長をしております。その仕事の一つとして、今年9月にウラジオストクへ行ってきました。

### 2016年のロシア極東経済

ロシア経済の低迷が言われて長いので心配しながら行きましたが、町の様子は以前とほとんど変わっていませんでした。ただ違うのは、スーパーマーケットで売られている商品から輸入品がほとんどなくなっていたことです。以前は7割ぐらいが外国製品で、そのうち半分は日本製品でした。それがほとんどなくなっていた。これは2014年初めのウクライナ、クリミア問題による経済制裁とその後の原油価格の大幅低下が原因です。原油価格の下落でルーブル安が進み輸入品が値上がりしました。経済制裁で外国製品が入らなくなって国産品の追従値上げも起こりました。インフレと個人消費の落ち込みが経済の停滞を招いたのです。しかし、2016年になって原油価格の上昇によりロシアの経済状況は持ち直しつつあるというのが現在の状況です。

### プーチン政権の「東方シフト」と経済特区・自由港

プーチン大統領は、「東方重視」ということで、ロシア極東・シベリアの経済開発に力を入れています。極東地域というのは、大雑把に言ってバイカル湖から東の広大な地域です。面積は日本の何倍もあるのに人口は630万人しかいない。若い人がみんなモスクワへ出て行ってしまおうです。隣の中国には東北三省だけで1億人はいる。このままでは経済的にも人口的にも中国に呑み込まれてしまう。これを何とかしなければいけない。ということで、プーチンさんは極東開発に取り組んでいます。

その中心的政策の一つが、経済特区・自由港の設置です。ウラジオストクの町を自由港＝フリー・ポートにする。



要するに経済特区と同じで、優遇税制と規制緩和で国の内外から投資を呼び込む政策です。ロシア極東の経済特区は外国企業の呼び込みと同時にロシア国内企業の進出をも期待しているようです。当初の目的は輸出企業の育成だったのですが、最近では輸入代替生産、現地生産化をも目的にするというふうになってきています。

### 農業生産(温室栽培)に進出目立つ日本企業

経済特区・自由港という仕組みの中で、日本からは石油化学エンジニアリング会社の日揮が、ハバロフスク市郊外でグリーンハウス、温室栽培の野菜作りをやっています。キュウリ、トマトといった野菜栽培で結構成功しているようです。そのほかにも、北海道の会社が温室栽培をやっているし、新潟大学が沿海州で大豆の試験栽培に取り組んだりしています。

これまで、新鮮な野菜はほとんど中国からロシア極東に入っていました。しかし、お金のあるロシア人は「中国産の野菜は子供に食べさせたくない」と言うのです。中国産野菜は化学肥料や農薬を大量に使っているという不安があるようです。温室で作ったきれいな野菜を適正価格で売るならば買う人はいくらでもいるということで、温室栽培が最近非常にはやっています。

### ロシア国内販売に目を向ける企業も

ウラジオストク近郊でコンピュータを作っているロシア人の会社があります。作ったコンピュータはロシア国内全土で販売している。何故ウラジオ近郊かというと、原材料、部品はすべて台湾と日本から輸入して、組み立てだけをやっているのです。コンピュータで成功して、最近スマートホンまで作るようになっていそうです。モノづくりというと輸出品の製造ですが、ロシアの場合国内で売ることを考えるようになってきた。というのは、経済制裁で西側からモノが入ってこなくなったために、輸入代替品の生産がロシア国内で拡大しているわけです。

2000年代の後半にロシア極東の経済を支えていたのは、日本からの中古車輸入関連ビジネスでした。私がウラジオストクにいる頃は上り調子で、日本の中古車がいくらでも売れ

たのですが、今では最盛期の4分の1に減少しました。今も結構売れているのは、建設資材のサイディング(外壁材)です。というのは、ロシア人は戸建ての家を建てたいというのがあって、しかも彼らは日曜大工が趣味ですから、自分で材料を買ってきて、ほとんど手作りで自分の家を建ててしまうのです。



### 信頼できるパートナーをいかに作るか

何をやるにしても、信頼できるパートナーをいかに作るができるか、それに尽きると思うのです。商売するとき、「こいつだったら騙されてもいい」と思えるような人間にいかに出会うか、そういう人間に出会った人は商売をうまくやっています。日本人は農耕民族なので、一発で儲けようとはあまり思わない。毎年どれだけ成長するか、伸びていくかというのが日本人の企業経営の基本的考え方です。ところが、ロシア人やヨーロッパ人は狩猟民族ですから、一発で儲けようというのが結構多いのです。そこをどうやって考え方を合わせていくかという点がポイントだと思います。

### 安倍政権の8項目提案

今年5月ソチでの日露首脳会談で安倍首相は「対ロ協力8項目提案」を行いました。この提案は非常によくできていて、とくに1番と2番はロシア国民のニーズに合っているというか、ロシア人を喜ばせることが書いてある。ロシア人の平均寿命は日本人の平均寿命よりまだかなり低い。健康問題は大きな関心事です。ウラジオストクに行けばよくわかりますが、ロシアの街はなかなかきれいにならない。交通網の整備や廃棄物処理など快適な都市づくりも切実な課題です。この辺でロシア人を喜ばせて、「島の問題」解決の条件を整備する魂胆かなと思いますが、この作戦は悪くないと思います。今のプーチンさんだったら少しぐらいの反対があっても、こうと決めればやるのではないかと思うし、日本の国内も安倍政権は安定しているので、これがよい方向に行けばいいがと思いつつ、新聞報道などを見えています。

### 対ロ協力8項目提案

1. 健康寿命の伸長
2. 快適・清潔な都市づくり
3. 中小企業交流・協力拡大
4. エネルギー協力
5. 産業の多様化・生産性向上
6. 極東の産業振興・輸出基地化
7. 先端技術協力
8. 人的交流の拡大

## 日本ロシア文学会 公開シンポジウム

# 「ロシアの文化 その魅力と鑑賞法」

日時:2017年7月8日(土)14時開始(予定)

場所:東京大学(本郷キャンパス)法文1号館113教室

(文京区本郷7-3-1) \*予約不要

入場無料 (どなたでもご来場頂けます)

ヨーロッパとは異なる文化を生み出してきたロシア。世界を魅了する文学や芸術の多くが、ロシア帝国で創られました。1917年に起きたロシア革命で帝国ロシアは消え、しかしそれから100年、ソ連時代を経て現代にいたるまで、ロシアはつねにその文化の力を発信してきました。

政治や体制は変わっても、ロシアは不思議な力で私たちを惹きつけます。でもその魅力は、本当のところ何にあるのでしょうか？ロシア文学には、どのような鑑賞の仕方があるのでしょうか？そしてロシア文化の力とは、どんなものなのでしょうか？

ロシア革命から100年の今年、日本ロシア文学会の精鋭たちが、こうした疑問に答えます。いっしょにロシア文化の魅力とその鑑賞法を学んでみませんか？

### プログラム (仮)

\*内容は変更される場合があります

#### Part I. ロシア文学の鑑賞法

望月哲男 (北海道大学名誉教授)

『白痴』と『アンナ・カレーニナ』

貝澤 哉 (早稲田大学教授)

「ナボコフ初期小説の楽しい読み方——『カメラ・オブスクーラ』、『絶望』、『偉業』を翻訳して」

鳥山祐介 (千葉大学准教授)

「18世紀にロシア文学などあったのか？」

#### Part II. ロシアの文化力を知ろう

大野斉子 (宇都宮大学准教授)

「シャネルNo.5とロシアの香水史」

平野恵美子 (東京大学助教)

「ラフマニノフと鐘」

司会:八木君人 (早稲田大学専任講師)

詳細は後日HPでお知らせします:

<http://yaar.jpn.org/> (日本ロシア文学会)

問い合わせ: Email: gakkai2017@gmail.com

## 《旅行記》ソロヴェツキー諸島

# 人を変えてしまう島

### 【第 3 回】 悲しきアンゼルの島

モロゾフ デニス (JIC 東京)

朝 6 時。朝食ボックスを受け取った私たちは 2 台のミニバンに乗り込み、少し慣れてきたでこぼこ道を急ぐ。今日はソロベツキー諸島のなかの一つ、アンゼルの島へ船で渡ることになっている。降りやまぬ雨の中、実に小じんまりとした船着き場に到着。ドライバーに「青い船」と言われたので、それらしき 1 隻を見つけ乗船しようとするが、船長は「何も聞いておらん。知らん」の一点張りで埠が開かない。

どうしたらいいのか分からないまましばらく待っていると、別の 2 台のミニバンが到着。降りてきたグループの中に本日のガイドがいた。彼は素早く誤解を解いてくれて、私たちはようやく中に入ることができた。船内は大変せまく、船底の両側に板を並べたようなベンチがあるだけの非常にシンプルな造り。参加者はどんどんそこへ座っていったが、全員座れるスペースはなく、最後に入ってきた数人はずっと立っているしかない。船底の先端に、用途不明な小部屋があり、たまりかねた何人かが入りこんで、寝そべるようにして座った。

#### 片道 2 時間の船旅は大揺れ

小型船はアンゼルの島を目指し始めた。外海に出るまでは揺れが少なく割と快適だったが、本格的な海に出た途端、船が大いに揺れ始めた。参加者の顔はみるみるうちに青ざめていき、船酔いにの嘔吐をこらえきれず、足早に上のデッキへ急ぐ人が続出。大揺れの拷問はおよそ 2 時間も続いた。誰の顔からも笑顔が消え、船内は静まり返っている。「まるでシリアの難民だ」というブラックジョークも飛ぶが、冗談好きなロシア人もこの時に限って反応が弱い。誰もが一刻も早くここを脱出したくてたまらなかった。

天気は一向によくならない。船は悪天候で予定の港に着岸できず、別の浜辺に向かった。浅瀬のため、私たちは小型船から一旦別のボートに乗り換えてから、島を目指す。

ようやく辿り着いたアンゼルの島は薄暗くて静かだった。トイレを済ませたメンバーはガイドの誘導のもと、今回の船旅の目的であるゴルゴファ・ラスピヤーツキー教会に向かって歩き出した。往復 10 キロのトレッキング・コースで、ほぼ平坦な



アンゼルの島・ゴルゴファ山頂にある修道院

森の中の道をただただ歩く。やや単調なトレッキングを楽しくさせてくれたのは道端を覆っていたブルーベリー畑たち。黒い実を取っては口に放り込む。甘酸っぱいこの味は雨模様染まっていた気持ちを少しだけ明るくしてくれる。

#### ゴルゴファ山の木造教会

ゴルゴファ山の麓には小さな木造教会が立っている。長年、ピョートル大帝の精神的な主導者の役割を担っていた聖イオフという人物は政治的な争いに巻き込まれた後、無実の罪を問われ、ここアンゼルの島に流刑を命じられた。夢のお告げに従って山をゴルゴファと名付け、教会を建て、厳かに暮らしていた聖イオフのもとには沢山の信者が集まり、アンゼルの島もいつの間にか名の知られる聖地のひとつとなった。

ソロベツキー特殊収容所時代には、ここは「病院」として使われていたそうだ。チフスなどの伝染病にかかってしまった人、体力の回復が見込めない人などはこちらの「病院」に送られていたが、その目的は治療ではなく、さっさと死んでもらうためであった。夏の間に囚人たちが自らの手で大きな穴 (100~200か所) を掘る。そして亡くなっていく人を順番にそこへ放り込んでいく。それでも穴の数が足りなかった時期もあったようで、真冬でもカチカチの土を割って、ゴルゴファ山の斜面に穴掘りが行われていた。伝染病の細菌を掘り起こす危険性があるため、いまでも調査が行われておらず、ゴルゴファ山の麓にはどれだけの遺体が埋葬されているか、見当がつかないらしい。

#### 不思議な白樺の木

山頂に構える修道院のすぐ手前に不思議な白樺の木が待ちかまえていた。ガイドによると、300 を超えるソロベツキ

一仕様の十字架は収容所時代にほとんど破壊され、30 本のみ奇跡的に残ったそうだ。このゴルゴファ山にも沢山の十字架があったが、すべてが取り壊された。しかし、十字架がなくなったとたん、一本の白樺の木が十字架の形を自然に取りはじめたらしい。人々はその白樺の木を十字架代わりにして密かに祈りをささげたという。本当かどうか定かではないが、間違いなく印象的な木で、私たちはその木の下で記念写真を撮った。



### 不思議な「十字型」の白樺

ゴルゴファ山の修道院は最近修理されたようで、ピカピカの内装を輝かせていた。ここはかなり特殊な教会で、昼の集会はない代わりに、夜通しのお勤めがあるそうだ。23時に始まり、朝方の4時に終わるといふ。



### 聖イオフの宿坊

最後に立ち寄ったエリアザルの宿坊は正直、印象の薄い場所だった。大昔の時代、修行僧はここに入り、一人暮らしをしながらお祈りに励んでいたようだ。ガイドは沢山の神話

を披露したが、どれも宗教性の高いものばかりで、私の心にもあまり響かなかった。



### エリアザルの宿坊



写真は、再建されたソロヴェツキー仕様の十字架。以前はこのような形をした十字架が、アンゼル島内のあちこちに建てられていたが、ソ連時代にほとんどが破壊された。ソ連崩壊後に、調査が行われ、再建が始まったが、復元にはかなりの時間を要するという。

\* \* \*

再び 2 時間にわたるひどい船旅の後、私たちはソロフキのホテルに戻り、少し休息した。しばらくして目を開けると、窓越しに青空が見えた。ソロヴェツキー旅行の最初で最後の青空。これを見逃す手はない。カメラを持って飛び出し、夕陽に染まり始めた海岸やソロヴェツキー修道院の写真をひたすら撮り続けた。

それまで重たい灰色のベールに包まれていた島は魔法がとけたように明るくて柔らかい表情を見せてくれた。黄金色の夕陽に染まる雲が長くたなびいている。この島はこんなにも美しく輝けるのかと、感動した。(つづく)

(私の個人ブログでソロヴェツキー島の写真特集を掲載しています。見たい方はこちらへどうぞ ↓

<http://denisuke77.livejournal.com/6944.html> )

## 【ロシア最新事情】

## 変わりゆくモスクワの街角

ソ連崩壊・新生ロシアの誕生から 25 年。モスクワの町はどんどん変わりつつある。新しい高層建築が各所に建てられただけでなく、市内中心部が見違えるほどきれいになった。

## 「モスクワ・ジャムの日」と歩行者天国

2016年7月16日(土)～17日(日)

マネージ広場、赤の広場～ニコルスカヤ通り

ポリショイ劇場前、ラジュデツヴェンカ通り～クズネツキー・

モスト～トヴェルスカヤ通り



昨年7月に訪れたモスクワでは、赤の広場周辺の中心部で「モスクワ・ジャムの日」というイベントが行われていた。いくつかの広場や通りが大きなジャムの壺や花のアーチ、屋台で飾られ、歩行者天国になっており、親子連れや若い男女で賑わっていた。

マネージ広場の横から赤の広場に続く通り道、赤の広場の Gum百貨店横からルビャンカまでつながるニコルスカヤ通り、ポリショイ劇場前の広場、ジェツキーミールの手前から始まるラジュデツヴェンカ通り、クズネツキー・モストがトベルスカヤ通りにぶつかるまでの通り、トベルスカヤの自由広場の前など、華やいだお祭り気分が溢れていた。

通りの真ん中には各種のジャムの屋台、そのほかハチミツ、アイスクリーム、菓子・パン、小物・アクセサリ、陶磁器などの屋台が連なっており、要所々々に小さなステージや広場があって、軽快な音楽が鳴っている。詩の朗読、ギター演奏などもやっけて、通りの両側に張り出したカフェのオープンテラスでは人々が食事や飲み物を楽しんでいる。通りは花や植木で飾り付けられ、ちょっといい感じの散策路が広がっていた。

ポリショイ劇場の前の広場にも花のトンネルがあり、中央の噴水の周りに屋台が出ていた。

モスクワ市内では、9月の「モスクワの日」、12月のクリスマス市場、年末年始の新年イベントなど、定番のイベントのほか、こういったミニ・イベントが度々開かれて、ちょっとしたお祭り気分が何回も味わえるようだ。



モスクワ「ジャムの日」イベント(ポリショイ劇場前にて)

市内はいつもどこかで道路工事中！  
「埋蔵金」探しのウワサは本当か？

モスクワ市内では、いつもあちこちで道路工事が行われている。敷石をはがして入れ替えたり、歩道を整備して花壇を作ったり、見るたびに通りの姿が変わっている。

市内のあちこちに工事現場があるのはやや見苦しいが、街は活気に溢れている。道路が整備され、町がきれいになっていくのはいいことだ。しかし、こんな小話もある。

「何でモスクワはこんなに道路工事が多いんだ？」

「そりゃあ、おまえ、前市長が大金をくすねてどこかに隠しやがったのよ。その埋蔵金を探して、新市長があちこち掘り返してるってわけさ。」

当たらずとも遠からず。工事が多い理由は、それが市長や市の幹部たちの利権にもなっているからであるらしい。実際、2～3年前に修理して作り直した道路でも、平気で掘り返して、また新しい歩道を造ったり、花壇を造ったりしているところもあるようだ。それらの工事は、市幹部の関係者が経営する会社が受注し、さらに関連会社に仕事が回っていく。その



マネージ広場近くの通りにて

過程で、「手数料」が次々と落ちていくという寸法だ。

真偽のほどはわからないが、モスクワっ子は結構醒めた目で工事中の道路を眺めてもいる。

## モスクワのビルのペンキ塗り

トヴェルスカヤ通りをクレムリンの方へ歩いて行くと、ちょうどリッツカールトンホテル(旧インツォーリストホテル)の向かい側のビルに、5~6人の作業員がぶら下がって作業しているのに出くわした。



日本でよく見かけるビルの窓ふきかなと一瞬思ったが、よく見るとビルの壁のペンキ塗り。器用にハケを動かして壁を塗り替えていく。ソ連時代には、この国にはおよそメンテナンスという思想は無いのではないかと思ったこともあったが、さにあらず。道路工事もビルの壁塗りも、首都モスクワの街を美しく保つ努力という意味では、「ロシアも以前よりは結構変わってきたんだなあ」と思える。

## モスクワ市内を電動車イスが行く！ 空港では障害者用トイレを発見！

これまで、モスクワやペテルブルグの街で、車イスに乗っている人を見かけたことはほとんどなかった。ロシアでは、建物の入口は段差だらけでスロープはまずないと言ってよい。地下鉄の「高速エスカレーター」に車イスで乗るのは介助者がいても極めて危険、まず不可能だ。もちろん街の通りも段差が多くバリアだらけだ。道路を渡る地下道の階段にはスロープが設置されているものもあるが、その傾斜はかなり急で、車イス用とは思えない。自転車か台車のようなものを転がして上り下りするためのものだろう。

今のところ、ロシアの街はまだまだ障害者に優しくないどころか、障害者にとって危険な要素に満ちている。

ところがである。昨年 7 月に「モスクワ・ジャムの日」イベントで歩行者天国になっていたクズネツキー・モストからトヴェルスカヤ通りに出たところで、歩行者天国に自走して入ってくる電動車イスとすれ違ったのだ。思わずあとを追いかけて写真に収めた。車イスは、通りに並ぶ屋台の電源ケーブルのカバー(高さ 2~3 cm)を軽々と乗り越えて、歩行者天国の人混みを縫いながら走って行った。

電動車イスを見送った後、トヴェルスカヤ通りをクレムリン

方向へ下っていく途中で、最近完成したばかりと思えるゆるやかなスロープの地下道入口を発見。あの電動車イスはここから出てきたに違いない。このゆるやかなスロープも、これまでロシアで見かけたことのない新しい発見だった。

スロープの出口周辺ではまだ歩道の整備工事が続いていた。モスクワの街は工事だらけだが、このような障害者に優しい街づくりが進むのは大賛成だ。いろいろあってもロシアはやっぱり変わりつつあるのだと感じさせてくれる発見だった。(最近、アレクサンドロフスキー庭園からクレムリンのチケット売り場に上がる入口にもスロープができていたのを見つけた)。



ついでながら、モスクワのドモジドボ空港のビジネス・ラウンジで見つけた障害者用トイレが下の写真。日本の多目的トイレのように多機能で設備が充実しているわけではないが、身体の不自由な人には十分使いやすいトイレだった。



空港のトイレ

外国人観光客がよく訪れる観光施設や空港などで車イスマークのベンチやトイレをよく見かけるようになったのも、最近のロシアの嬉しい変化の一つだ。



(左)クレムリンの入口 (右)エルミタージュ美術館にて



## 【ロシア生活 不思議体験】

# 国境を超えると世界は変わる

白井 秀治 (JIC 東京)

長い期間、海外で生活していると帰国ルート色々調べることもある。例えば、料金的に一番安いルートはもちろん、知人宅を訪問してからのルートや最短時間で日本へ行くルートなど。

僕の場合、留学地がサンクト・ペテルブルグという地理的条件があったからかも知れないが、留学生仲間は北欧出身の学生が多かった。中でもフィンランド人の友人は非常に多かった。フィンエアーのヘルシンキ成田便は当時週 2 便であり、フィンランド人の友人や知人宅に数泊してから日本へ帰国できるし、また日本からロシアへ再入国する際もヘルシンキ経由でペテルブルグというルートが早くて一番都合が良かった。それゆえ、僕が最も利用していた航空会社はフィンランド航空だった。

フィンランド航空は 1963 年に何かしらの事故があったらしいが、それ以来一度も事故を起こしていない世界で最も安全な航空会社として評価されている上に、ヘルシンキ成田便には日本人パーサーも搭乗しておりサービスも一流。不愉快な経験は一度もしたことがない。

家庭の事情で、年末から始まる試験期間の直前に一時帰国しなければならなかったある年の 12 月半ば。ペテルブルグ・プルコボ空港を定時に出発したフィンエアーは 15 分の上昇後、水平飛行中にデューティーフリー販売、コーヒーブレイク、飲み終わったカップの回収などを 30 分以内にキャビンアテンダントが行い、着陸態勢に入って 15 分後に何の無駄な時間も無くヘルシンキ・ヴァンター空港に定刻に着陸した。

ヘルシンキ・ヴァンター空港。

12 月の昼過ぎ、この北欧の地はペテルブルグ同様すでに薄暗い。いつもは程良い空港内の照明光度がその日は半分くらいの明るさに抑えられ、ちょっとムーディーな雰囲気だった。

「何かあったのかな？」

僕は何となくいつもと違うヴァンター空港国際ターミナル内を成田便が発着するゲート 37 に移動していた。直ぐに、いつもよりも照明光度が抑えられている理由が分かった。インフォメーションカウンターの側に柔らかなス

ポットが当てられたステージが設けられていた。そこでは生演奏によるクリスマスソングがフィンランド語で静かに心地よくそして優しい笑顔で歌われていた。「忘れていた。世の中はもうクリスマスムードなんだ…」

数時間前にいた留学地の 500 万人都市では「クリスマスムードって一体何のこと？」と

言うほど殺伐とし、街中は単に薄暗いだけだった。普段からスリに注意しながら足早に目的地へと移動する習慣が身につけてしまっていることが嘘のように、この北欧の地は平和で穏やかで温かく、僕はクリスマスソングを歌う女性の歌声をただ聴き入ってしまった。ふと我にかえり辺りを見回すと、インフォメーションの女性、デューティーフリーショップ、カフェのスタッフ…、みんな自然な笑顔だった。

笑顔。

そう。この北欧の地には笑顔があるんだ。

「そう言えば…普通に穏やかな気持ちになれるのは何ヶ月ぶりだろう…？」

僕は自問したが、答えを見つけるのがあまりにもバカバカしくなり心の中でその質問自体をデリートした。

『国境を越えれば世界は変わる』と改めて認識した瞬間だった。

僕はフィンランドというよりもヘルシンキに基本的には数日しか滞在せずいつも通過するだけ。フィンランド国内で行ったことのある街も、タンペレ、イヴァロ、コトカ、サヴォンリンナ、ラフティ、トゥルク、ロヴァニエミ、ナアンタリ、…ん？そこそこ行っているか。。。それでも今までの滞在日数もトータルで 30 日位。生活をしていないので、もちろん、その実態は分からないことだらけだが、ヘルシンキに限らずどの街に行っても、すれ違う人々の表情は穏やかで身につけている衣服はカラフルな上にみんな親切。街は清潔だし、行き交う車や路面電車、バスなども手入れが行き届いているのが一目瞭然。何処へ行っても常に印象が良かった。

一方でヘルシンキから東へ僅か 350km しか離れていない大都市は…。いや。『国境を越えれば世界は変わる』。肝に銘じておかなければ…。比較の対象にしない方が良い。隣の芝は青いものなのだ。絶対にそうに決まっている。完全に自己完結、自己暗示を繰り返す始末になった。

ムーディーなヘルシンキ・ヴァンター空港のひとつときを楽しんでいる中、僕が乗る成田空港行き飛行機の遅延情報が飛び込んできた。

折り返し成田へ運行される MD-11 型機は、季節外れの強

かな低気圧の通過により現地予定離陸時間が 2 時間遅れたとのこと。必然的にヴァンター空港への到着も 2 時間遅れることだ。搭乗手続きが遅れるということは心地よいライブ演奏を聴ける時間が長くなるということ。それは僕にとって嬉しいことだった。カフェでサーモンサンドとコーヒーを購入し、僕はインフォメーションカウンターに一番近いベンチに腰掛けて寛ぐことにした。

それにしても隣の国で同じ状況になっていたらどうなっていたことだろう。恐らく、遅延理由のインフォメーションはなく、客は状況も分からないまま空調が効いていない搭乗ゲート付近でとにかく待つしかない。状況が分からないのでコーヒーも買うことができない。必要なことは「the 忍耐」、「It's 途方に暮れる」、「what does that mean- “待ちぼうけ”？」を適度にセルフコントロールするだけだ。

色々な感情が頭の中で生まれては消え、消えては生まれ、宇宙の誕生と世界の終りについて考え始めたころ、MD-11 型機が 37 番ゲートに到着したことを構内アナウンスで知った。僕は機内持ち込みのバックを手に取り搭乗ゲートに足を向けた。

37 番ゲート。

そこで目撃したものは！！！！

なんと！！！！

ボーディングブリッジを通過してくる疲れた表情の日本人客にサンタクローズがムーミンデザインの小物を一人一人に手渡している姿だった。

日本人にとっては最高のシチュエーション。フィンランドに到着して最初に接したものが、サンタからのムーミンプレゼント。こんなに素晴らしい演出はフィンランドならでは。言うまでもなく、疲労感を漂わせていたパッセンジャー全員が瞬時に笑顔になり。サンタクローズと一緒に記念撮影が始まった。この段階で旅行者は 1000%フィンランド大好き、絶対にフィンランドリピーターになることだろう。傍から見ていても微笑ましい光景だった。

同じようなシチュエーションを最近社会主義を脱した国に当てはめると…「ジェットマロースとスニエグーラチカがマトリョーシカを配る」ことが予想される。マトリョーシカを受け取る日本人観光客は嬉しく思うが、同時にこの赤い服を着たおじさんと青い服を着た女性は一体誰なの？という「謎かけ」がつきまとうはずだ…。

しばらくすると、AY073 便成田行きの搭乗手続きが始まった。振り返ると、日本人観光客はまだサンタクローズと記念撮影をしていた。そして予定離陸時間よりも僅か 1 時間遅れで離陸に至った素早さもフィンランド人のなせ

る業。流石です！

機内ではフィンランドのオリジナルビール「ラッピンクルタ」通称ハチミツビールが飲み放題のフィンランド航空。日本ではめったに手に入らないので、貧乏根性丸出しで 7 缶は頂いてしまった。そして成田空港到着時にはパーサーが僕に寄ってきて、ウィンクをしながら僕のバックの上にラッピンクルタを 3 缶置いていった。

やはり何かしらフィンランド人を素敵に思ってしまうのは僕だけだろうか？

野暮用を終えて、ペテルブルグへ帰るときもフィンエア。ヘルシンキまでの機内では食事美味しく快適。全てが予定通りで白銀のヘルシンキに滑るように着陸した MD11 型機は優雅だった。

帰国する時と同様に空港内の照明は適度に落され聞き覚えのあるメロディーが心地よい。ペテルブルグへの乗り継ぎで再びヴァンター空港内を移動。改めて、自分の乗る飛行機を確認しようとチケット見ると…、何故か航空機コードが AY ではなく FV だった。

「ん？FV？なんじゃこれ？」

慌てて構内にある到着便・離陸便のリアルタイムモニターで確認すると、FV というコードはプルコボエアと判明。ペテルブルグ-プルコボ空港が所有している航空会社だ。何か…グレーな予感が…。

予感はある中。

飛行機は機内整備に時間がかかり 1 時間遅れでヴァンター空港にやってきた。ヴァンター空港の窓越しにボーディングブリッジに近づいてくる飛行機が見えた。これまた…予想通り。機銃が取り外されているとはいえ銃座付の民間旅客機 TU134 型機。なんて恐ろしい…。どこの戦地から…、そして何処の戦場へ僕を空輸しようとしているのだろう…。

さらにグレーな予感は重なり、乗客よりもいち早くゲートを出てきたのは銃座付き旅客機の女性搭乗員。彼女の行き先はあろうことにデューティーフリーショップ。

僕は拳に汗をかいた。

グレー予感は続きがございまして…。

搭乗手続きが開始されると一番前にならんでいた酔っ払いロシア人客が搭乗券を紛失していることが発覚。他の乗客を先に流せばよいものの、何か訳の解らない押し問答が始まる始末。無駄に時間がつぶされていく。後ろに立っていた明らかにフィンランドバリバリビジネスマン風の男性と目が合った時、彼は肩をすぼめて手のひらを返し困っている様子を僕に見せた。きっとロシア式搭乗手続きに慣れていないんだろう。

10 分以上の格闘の末、酔っ払い客は何処かに連れて行かれた。恐らく、極端な泥酔状態だったため搭乗拒否さ

れたものと判断。一件落着。

ようやく、機内に入り着座。防護ベルトを腰に巻き、定刻より1時間20分遅れで戦闘旅客機はエプロンから滑走路へ移動。耳に残る甲高いエンジン音を轟かせヴァンター空港の滑走路を這いつくばり夜のヘルシンキ上空へと発射されたのはもちろん TU134 型機。

離陸して水平飛行まで15分。水平飛行30分。着陸態勢に入り着陸まで15分。飛行時間は約1時間。我慢すれば良いだけ。「the 忍耐」を習得している僕は自分に改めて言い聞かせた。

ところが！民間軍用機が着陸態勢に入り高度を下げながら旋回を始めた時、グレーな予感のミラクルが始まった。

ヴァンター空港で乗客よりも先に出てきてデューティフリーショップへ駆け込んだ女性搭乗員が唐突にコーヒーを僕にお持ちしてくれたのだ。すでに着陸態勢だし、「要らない」という客の懇願に反して、「この状況下、持ってきてやったんだから早く飲め！」とその眼差しから女性戦闘員の揺らぎない意志を読み取らせて頂きました。しかも、このコーヒー…何処の『炉』から持ってきたのだろうか？と思うほど超 HOT。着陸までの15分弱でこのコーヒーを飲み干すのは至難の業。さらに悪いことに、機体は緩く旋回しながら高度を下げています。同一の慣性系にいるものの、カップに入っているコーヒーの面はあくまでも地球の重力に対し常に垂直。機体と同一の傾きを持ちつつ軽い遠心力を感じる自分の身体に対し超熱いコーヒーの入ったカップをバランスを保ちながら口元に運ぶ訓練など受けたことが無い僕にとっては涙ぐましい体験になった。いや。本当に涙しながら飲んだ。

そして、銃座付き民間軍用機は無事に基地へ帰投。エプロンでは迷彩服を着た誘導員。自動小銃を肩にぶら下げる警備兵。パスポートコントロールでは菊の紋章の入ったパスポートを叩き返され何とか通過。荷物を受け取り、到着ロビーに出ると四方八方から低いトーンで「TAXI?」と黒いジャケットを身に纏うおっさん達からお声掛け。ヘルシンキでのグレー予感はお釣りで頂きました。

「やれやれ…帰ってきちゃったなあ。。。」星も見えない夜空を見上げ僕はつぶやいた。

あれから20年以上経つ。  
今ではかなり変化したと思いたい。  
時々思い出す。

## ◆◆編集後記◆◆

▼今号は、ロシアセミナーでの下斗米伸夫先生の講演録を中心に編集しました。昨年末のプーチン大統領訪日と日ロ首脳会談で、北方四島の共同経済活動の協議が動き始めています。日ロ関係の変化の背景に何があるのか。是非ご一読ください▼米トランプ政権による突然のシリア空爆で米ロ関係にはわかに雲行きが怪しくなってきました。ヨーロッパ、エジプト、トルコ、そしてロシアでも IS(イスラム国)のテロ事件が止みません。これ以上テロと戦争が拡大しないことを祈らずにはおれません(F)

## \* \* JICのロシア語留学・研修 \* \*

### 28年間の実績「だから、JICのロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この28年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,300 名以上にのぼります。

### 安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様にバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

## ロシア語長期留学9月生・募集中



**締切間近です  
今すぐお申し込みを!**

**期間：2017年9月1日より10ヶ月**  
**締切：2017年6月16日(金)**

モスクワ国立大学 710,000 円(授業料 10ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 815,000 円(授業料 10ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 326,000 円(授業料 10ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などががかかります。

※極東連邦大学は、10月1日から10カ月になります。

### ◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください